C－1

主題	手作り布マスクとお手玉からつながる地域の輪
副題	心の距離が縮まる中で見えてきた施設が果たす役割

キーワード 1	手作り布マスク	キーワード 2	地域との関わり	研究(実践)期間	24 ヶ月

法人名・事業所名	社福）浴風会　特別養護老人ホーム南陽園
発表者（職種）	鶴田崇（機能訓練指導員）、友部貴弘（生活相談員）
共同研究(実践)者	髙井知貴、川本邦博、福島尚子

電　話	03-3334-2159	ＦＡＸ	03-3334-1745

事業所紹介	社会福祉法人浴風会は、杉並区高井戸にある高齢者医療・介護の複合施設です。南陽園は、入所者 242 名・併設ショートステイ 12 名の計 254 名の特別養護老人ホームで、2025 年の法人創立 100 周年に向けて、職員が一丸となりより良いサービスの提供に努めています。

《1．研究(実践)前の状況と課題》

機能訓練室では、ご利用者の体力や筋力低下の予防を目的とした運動と合わせ「今日も楽しみだわ」と思っていただけるような時間を日常生活の中に持てるよう制作を中心とした作業活動の時間を大切にしている。趣味嗜好に合わせパズルや塗り絵など多種に渡り準備しており、アートフラワーや展示用の大型作品のほか、車椅子用クッションの制作に取り組まれているご利用者もいる。作品は当園のロビーと各フロアで展示しており、手作りの車椅子用クッションは実用面だけでなく温かみのあるデザインも好評であった。また、地域の皆様にも見ていただけるよう作品展も開催し、より多くの方の目に触れることで制作したご利用者も喜ばれていた。

その他では機能訓練室を利用した介護予防自主グループがある。近隣の高齢者を対象とした週一回のマシントレーニングを開催し、運動だけでなく交流の場としても活用されていた。しかし、これらの活動はそれぞれが独立しつながりに乏しく、新型コロナウイルスの影響もあり地域と施設との距離も広がりつつある現状があった。

《2．研究(実践)の目的ならびに仮説》

あたりまえにあった地域との直接の交流が減少していくことは、ご利用者の生活リズムの変化や意欲の低下にもつながる。またその中で園内の個々の活動を活発化し継続していくためには、比例してマンパワーや材料費が必要となる。そこで、物理的な距離を縮めることが難しい今だからこそできる交流があるのではないかと考えた。受け身ではなく施設から地域へ向けた関りを検討し実践していく中で、施設が地域の輪の中で果たすことのできる役割を見つめ直すことを研究の目的とした。

《3．具体的な取り組みの内容》

新型コロナウイルスの影響によりマスクが不足したことや外出が制限されたこともあり、生

無断転載・複製を禁じます。

活の中に少しでも楽しみを届けようと作業活動の一環として布マスク制作を始めた。施設分を作り終えたのち制作したご利用者の皆様と相談し、制作を継続しこれまで交流のあったボランティアや近隣商店街の皆様、保育園や小学校の子供たちへ恩返しの気持ちも込め布マスクをお送りさせていただいた。その後も活動は続き、布マスクの余り布を使ったお手玉作りにも取り組んだ。こちらも子供たちに明るい気持ちや楽しみを届けられればと近隣の複数の小学校にプレゼントさせていただいた。また、楽しみながら取り組むご利用者の様子を少しでも知っていただければと約二年に渡る活動をホームページやロビー展示にてお知らせした。

《4．取り組みの結果》

布マスクとお手玉をお送りさせていただくと、ご利用者宛にお礼のお手紙が届き始めた。中には直接来園される方やお返しにと子供たちの作品をいただくこともあった。受け取ったご利用者は嬉しそうな表情を浮かべ誰かの役に立てる喜びを実感されることで制作意欲にもつながっていた。またホームページや口コミで活動を知った地域の皆様やトレーニングの参加者から「制作に使ってほしい」と材料のご寄付が届くようになった。布マスクとお手玉だけでなく、これまでの作業活動をより広く知っていただくことでご寄付の材料は多種に渡り、車椅子用クッションなど他の制作にも活用することで材料費も削減された。

活動を知りボランティアの希望も増加した。ボランティア内容は布マスクとお手玉制作からスタートしたが、これまでの活動も知った皆様がご友人やご家族を紹介して下さり、活動が終了した現在も多くのボランティアによってご利用者の日常の楽しみが支えられている。

《5．考察、まとめ》

課題であった個々の活動のつながりが乏しいことや地域との距離が広がっていた要因として新型コロナウイルスの影響のみではないということが取り組みによって見えてきた。最も大きな要因はこれまでの関わりの多くが地域から施設への一方向であった点だと考える。「来ていただく」「お手伝いしていただく」という受け身の姿勢が多く、施設から地域へ踏み出す機会が乏しかった。さらに感染予防による物理的な距離の開きが加わると「できなくなったこと」ばかりに意識が行きがちとなった。今だからこそできることを考えご利用者とともに踏み出したことで心の距離が縮まり地域の輪へ参加することができたのではないかと考える。それにより、現在はコロナ禍以前より活発な活動が地域の皆様に支えられながら継続している。

また、一方向ではなく双方向の活動を継続していくことで地域の皆様のやりがいや居場所作りにもつながったことから、施設がご利用者と地域とを結ぶ懸け橋の役割を果たすことができるのではないかと考える。

《6．倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7．参考文献》

高齢者のその人らしさを捉える作業療法
（2015 年３月発行　発行者　文光堂）

《8．提案と発信》

さまざまな活動は現在も継続しており、研究後の現在は地域ケア会議や地域包括支援センターと協働した体操教室にも参加し地域の課題に触れる機会も増えている。今後も今だからできることを考え続け双方向の関りを継続することで少しずつ輪を広げていけるのではないか。

無断転載・複製を禁じます。